

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2021年(令和3年)4月16日 金曜日

無料

第107号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)4月16日 金曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、67歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の「大崎新4型製作趣意」を研究する。この文化発掘を



多くの大震災を潜り抜け千年以上の歴史を持つ東北郷土芸能を東北再興の基盤に！

大震災の直後に起きた奇跡

あの大震災直後、大津波に襲われた三陸被災地で起きた奇跡的な出来事をいまだに忘れることができない。津波で流され、行方不明となっていた被災地の郷土芸能に用いられていた「獅子頭」があちこちで見られたのだ。

そして、その地の被災者の方々が、奇跡的に見つかった獅子頭で従前のように郷土の芸能を舞って欲しいと舞手たちに懇願したのだ。

地震と津波で被災地は破壊され、日々の衣食住にも事欠く極限状況下で、なぜ祭りなのかと、いま郷土芸能を舞ってもよいものかと舞手たちも戸惑いながらも、強い要請に従って舞ったというのだ。

往時の被災者の方々にとっては、「奇跡の獅子頭」で郷土の芸能を復活させることは、目先の衣食住よりもはるかに大事なことであったのだ。

たのだ。でも、なぜだったのだろうか。筆者はその場に居合わせることも出来なかった。どのような情景が展開されたのかは詳らかには知らない。しかし、見る側も舞う側も、非常に特殊で強烈な感情で結ばれていたに違いないと思う。

誤解を恐れずにいえば、その強烈な感情は宗教感情に近いものであったと考えられている。こうした事例が被災地ではいくつも起きたと聞く。

筆者はたまたま、津波で流された獅子頭の修理を請け負った東京の祭り関連企業で、奇跡的に見つかった獅子頭のひとつに直面することができた。

泥だらけになり、一部は壊れ、たぐさんの傷がついた獅子頭を見て、不思議なことだが、「まだ生きています」と感じた。

その後、東北の郷土芸能の持つ意味を深く追及しなかった。しかしながら、震災直後には大きな話題となった獅子頭であるが、この十年間で、なぜ極限状態に置かれた被災者の方々が獅子頭を用いた郷土芸能を欲したのかについて、さらに深く追求したという話は残念ながら筆者には届いて来なかった。

こんな大事なことをどうして放置したのか、深く追求していかなかったのか理解に苦しむ。

それだけでなく、あれほどの大震災にもかかわらず、被災された方々はみな冷静であったことを美談として取り上げたが、なぜ冷静でいられたのかについても深く追求されたという話は聞えて来なかった。

そうして、この大震災は、甚大な被害とショックを日本中に与えたが、それでも一過性の大自然災害として記憶されるだけで、その深

意味は忘れ去られるのだろうか。そういえば、郷土芸能に詳しい知人に聞いたのだが、東北の郷土芸能の存在は、あの大震災後に初めて全容が確認されたのだが、それまでは専門家でも知らなかった郷土芸能が、がれきの中から突如、数多く「発掘」されたのだという。

千年以上の歴史を有するということの意味

震災後の調査によれば、東北各地に残る郷土芸能は実際にはかなりの数にのぼるようだ。

その起源についてもさまざまであるが、専門家さえよくわからないようだ。結果的にどれ一つとして正確にその歴史は分からないようだ。

分からないままにしておけないとは思うのだが、探求の熱意は一部からしか聞えて来ない。

これほどの歴史遺産なのに、しかも大震災直後の状況下でも、衣食住に優先して必要とされた伝統遺産を調べないのはまったくもって不可解である。

筆者はその道の専門外ではあるが、あえて素人分析をさせてもらえば、その歴史は古いものと千年以上も遡れるものと思う。

いや、もっともっと古いのかも知れない。

その継承の歴史において、数々の大災害も乗り越えてきたであろう。また、

単なる祭りとしての郷土芸能ではないとも考える。いわば、生きた歴史遺産であり、集落の人々を強力に結びつける絆であり、何十世代にも亘って継承されてきたものである。

しかし、皮肉なことに、その存在は大震災ではじめて明らかになったのである。それまでは、三陸の沿岸部集落に何百年も千年以上も埋もれていたのである。

郷土芸能は観光資源ではないということの意味

その後、これら震災後にたくさん発掘された東北郷土芸能を観光資源にしようという話も耳にした。

一方で、それは神事であり、単なる見世物として観光資源に活用するのはおかしいという声もあったようである。

筆者としては、どちらの考えも偏りすぎていると感じる。

多くの人に見せるのは悪いことではない。関係者以外には見せないというのはかたくな過ぎると思う。

とはいえ、単なる見世物興行ではないのだから、節度をもって見たい人には開放すればよいのではないかと感じる。

他方、神事であるから、あまり多くの人に開放すべきではないというのも極論に思われる。

神事であることを維持しながら、公開すればよいと考える。

震災後には、集落の郷土芸能の維持運営に支障をきたすところもあると聞く。ひとつは、集落の人口減少で寄付が集まりにくくなっていることがある。もう一つは、後継者問題である。

これらの課題を解決する方法を見つけ、千年ほどの歴史が途切れることのないようにして欲しい。

東北アイデンティティは言語／歴史／文化

郷土芸能をうまく継承しながら、日々の生活にも取り込んで、生きた文化を作ること成功しているのが沖縄である。

そうした文化を共有しながら、うまく伝統を活かし

つつ、沖縄としての強烈なアイデンティティを形成していると感じる。それには、幾多の先人たちの苦勞があったようだ。しかもそれは比較的新しい近年のことである。

沖縄に関するかぎり、伝統文化は人々を活性化するのである。

もっと深く掘り起こし東北再興の基盤に

この点では東北も沖縄を見習って、郷土芸能という伝統文化による東北アイデンティティを確固として、東北再興の基盤にしてほしいと願う。

やはり、文化はしっかりと「根っこ」を根拠にしないと浮ついたものになってしまうと思うのである。



獅子頭イメージ画像



岩手・大乘神楽①



岩手・大乘神楽②



遠野祭—しし踊幕系



岩手・しし踊太鼓系



岩手・鬼剣舞



宮城・大室南部神楽



宮城・石巻 川開き祭花火



福島・相馬野馬追



岩手・大槌町 虎舞



岩手・大槌町 神輿行列



東北六魂祭一青森ねぶた



東北六魂祭一岩手さんさ踊り



東北六魂祭一山形花笠踊



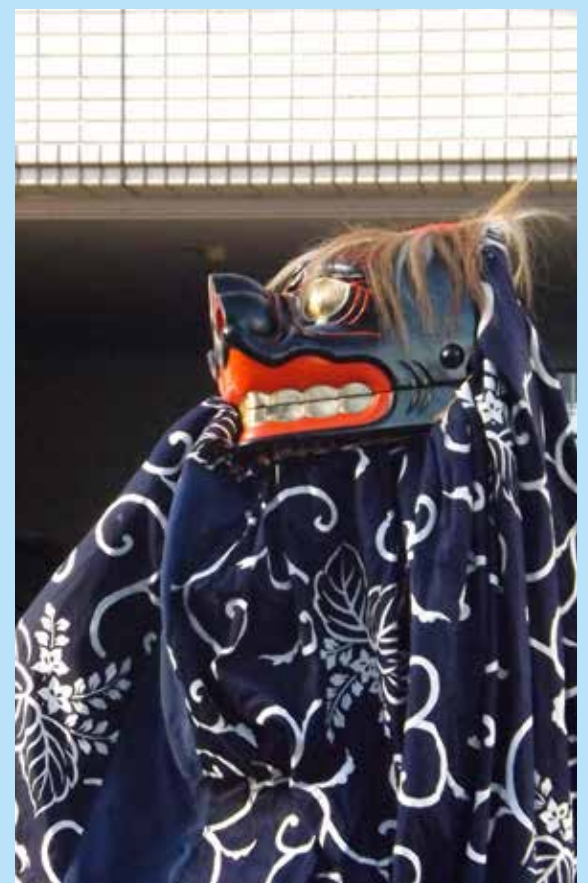
東北六魂祭一宮城すずめ踊



東北六魂祭一秋田竿灯



東北六魂祭一福島わらじ祭



権現舞



第80回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

《手間入らずの ちらし寿司》

簡単に出来て、見た目も
華やかな手間入らずの
ちらし寿司です。

（松本談）



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料— 酢めし（米1合、酢20ml、砂糖8g、塩4g）、マグロ刺身7切、ルイベ刺7切、海老5本、炒り卵2個、とびっこ50g、菜の花5本

—料理方法— ① 酢めしの調味料を合わせ、ご飯を作っておく。② 卵を溶いて、フライパンに軽く油をしき、割り箸でほぐしながら炒り卵を作る。③ 菜の花は茹でて3cm長さにカットします。（キヌサヤなどでもよい）④ バットかタッパーにサランラップを敷いて、マグロ、ルイベ、隙間に炒り卵、菜の花、海老を並べて軽く押しをします。⑤ お皿にバットをひっくり返し、形が整ったら、とびっこをのせます。

※とびっこを乗せると味わいが豊かになりますね。（松本談）

三陸の会は延期してから1年以上経ちました。ほんとーに早くみなさんに会いたいです！そして美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！でも再開までは写真画像と家飲みで何とか耐えてください。再びお会いできる日を首を長ーくして待っております！

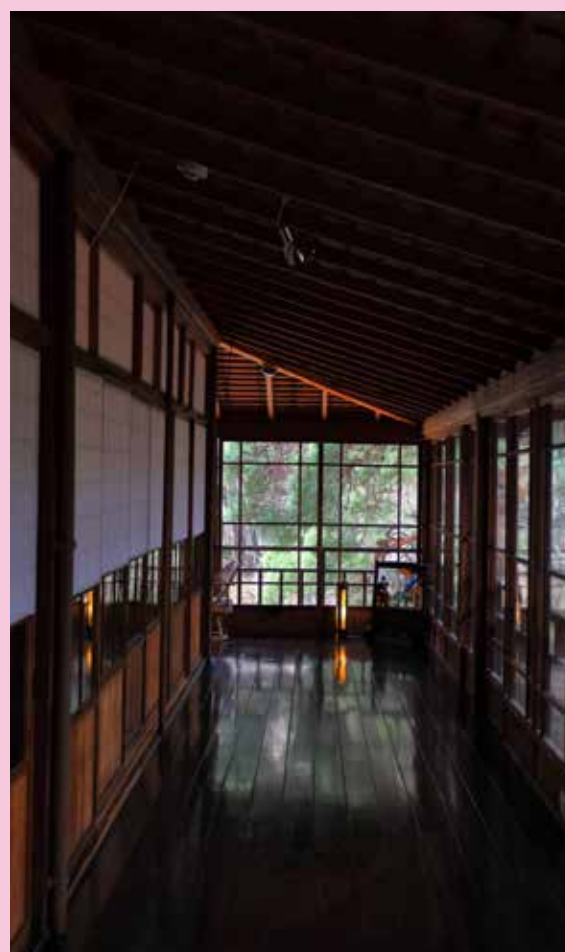




写真でお伝えする
東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群薬
「岩手の春」

写真撮影
尾崎匠



仙台のライバルは福岡?

市長も「ライバル都市」認定

二月十九日の仙台市議会定例会の一般質問で面白いやりとりがあったようである。当日の会議録はまだ仙台市議会のサイトにアップされていないが、動画で閲覧することができる。

佐藤正昭氏が質問に立ち、「今まで世界一を目指すと激励してきたし、そうなるってほしいとの考えは変わらないが、現実的に目標、ライバルが必要だと私は考える」と前置きした上で、仙台市が昨年首都圏企業向けに行った意識調査の結果、新型コロナウイルスの流行後に地方へのオフィス移転・増設に関心があると回答した企業について、その移転候補地を尋ねたところ、仙台市が福岡市に次いで二番目に多かったことを挙げ、

「私は、今や、札幌市や広島市は眼中にはありません。福岡市だけが、唯一、本市のライバルたり得ると考えます」と主張した。そして、「この際、市として福岡市を姉妹友好都市ではなく、ライバル都市

に認定してはいいかがでしょうか？」と市長に見解を求めた。

これに対して、郡和子市長も福岡市について、「アジアの玄関口」として、経済発展を続ける非常に勢いのある街」との認識を示した上で、「私はいわばライバル都市として、その動きを注視していくとともに、多くの自治体が創意工夫による街づくりを進めている中で、これら国内の諸都市とも、その中でも競争に打ち勝っていくという強い覚悟を持っていく」と答弁した。佐藤氏の主張に同調し、福岡市を「ライバル都市」と位置づけた形である。

このやり取りは、翌日の河北新報でも報じられたが、その記事を見た福岡市の高島宗一郎市長は自身のブログで、「仙台の街も大好きです。私は東京一極集中の次は地方拠点都市の時代だと思えます。ぜひ東西から日本を盛り上げましょう！」と書いていた。

発信と行動が卓越した市長

のは二〇一六年の熊本地震の折である。あの時、福岡市は独自に熊本への支援を行った。その原動力となつたのが高島市長自らのSNSによる情報発信だった。東日本大震災の折に各地から届いた物資が、仕分けなどの不徹底で迅速に避難所に届かなかった事実などを見て、高島市長は必要な支援物資が何かを熊本市の東西市長に直接確認し、その提供を市民に呼び掛け、廃校となった学校の教室ごとに同じ物資を集め、現地での仕分けが必要ない形で被災地に物資を直接送った。福岡にはすごい市長がいるなど驚いたものである。

高島市長の著書「福岡市を経営する」を読むと、さらにその感を強くする。とにかく、その情報発信力、行動力が図抜けている。元々、「札幌・仙台・広島・福岡の地方四都市の中で、福岡の勢いは他の三都市を上回るものがあったが、高島氏が市長に就いてからさらに、国際会議などの開催件数が全国の政令指定都市の中で一位、クルーズ船の寄港回数が横浜を抜いて日本一、スタートアップに力を入れて全国で唯一四年連続で開業率七パーセント台、政令指定都市で唯一五年連続税収が過去最高を更新、地価上昇率は東京や大阪のおよそ倍、人口増加率も東京を抜いて一位、とのこと、とにかく他を寄せ付けない圧倒ぶりに見える。著書の中にも、印象に残る氏の言葉がたくさん散らばめられている。曰く、「友達は誰か。苦しいときにこそ見えてくる」「チャンスが来たときがベストタイミング」「認めてもらうためには、小さくても結果を出し続ける」「数字は嘘をつかない。だから数字で流れを変えよう」「全員」を意識すると動けなくなる」「リスクをとってチャレンジする人のために時間を使う」「自分の命は、役割があるところに導かれる」「決断こそリーダーの仕事である」「プロセスを丁寧に見える化」する

「発信力を上げるためには、シンプルに伝える」「三六〇度、全方位から批判される決断もある」「決めない」は最悪の選択」「正しい情報は常に現場にある」「大切なのは、言い出した人が動くこと」「批判よりも提案を、思想から行動へ」「人を幸せにするのは、『今日より明日がよくなる』という希望」

「変えるには、まず『やってみせる』のがいちばん早い」「明日死ぬかのように今日を生きて」「成功の反対は挑戦しないこと」再三強調しているのが、「決断」である。リーダーの仕事は決断すること、そしてその決断はなるべく早く行うことが大切だ、と氏は繰り返して述べている。これはまさにその通りであるが、それを実際にできているリーダーは数少ないのではない。逆に福岡は、高島氏がそうした決断を積み重ねてきて今の姿があるのだらう。

ある。このような自らの実力を過大視した結果生じる驕りは、仙台のさらなる発展を考える上では邪魔なものでしかない。他に学ぶものなどないと思つたところから、停滞や下降が始まるのである。学ぶべき対象は札幌や広島、福岡だけではない。以前、前橋や金沢と仙台を比較したことがあったが、それこそ国内外のあらゆる都市それぞれにも学ぶべきところがある。他地域の都市のそうした特長を認め、その中で仙台に活かせるものはないか考えることが必要なのであつて、そうした学びもせずに「眼中にない」などと高を括る態度は百害あって一利なしである。

この「WITH THE KYUSHU」プロジェクト、元々の発足のきっかけは熊本地震だったようである。地震で被害を受けた熊本を支援するための様々な取り組みをこの名の下に始めたのである。それにしても、早い。熊本地震が二〇一六年の四月一日だが、高島市長が自身のブログでプロジェクトの発足を宣言したのはそのわずか三日後の四月十七日である。ちなみに、仙台市に東北連携推進室ができたのも、同じ二〇一六年四月のことである。

地域全体との連携も抜かれない。福岡、さすがである。高島氏の著書でも触れられていない、目立たない取り組みかもしれないが、これこそ東北連携推進室を擁する仙台が他都市にすぐき取り組みである。と言うより、このような取り組みを先にやられてしまつていくようなのは仙台の東北連携推進はまだである、と言わざるを得ないのが残念なところである。今後の独創的な取り組みに期待したい。

ところで、気になることがある。福岡の「WITH THE KYUSHU」の説明文である。そこには、「福岡市は、九州との深い関わりに支えられ、九州とともに成長してきたまちです。まさに福岡市の発展は、九州とともにあります。政令指定都市の中で五番目の人口規模となったことを受け、九州の拠点都市としての役割をあらためて認識し、「WITH THE KYUSHU」として、九州各地の自治体と連携し、九州の発展につなげることを目指してさまざまな取り組みを推進しています」とある。なんだなんだ、東北連携推進室の説明とそっくりである。どちらがどちらを参考にしたのか、あるいは偶然似たのか(にしてはあまりに似ている)調べた限りでは分からなかったが、仙台が考えていることは福岡も考えている、ということはおそらく分かった。結局のところ大事なことは、高島市長の言に尽きるのであろう。「ぜひ東西から日本を盛り上げましょう！」

執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagna51

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



クロッカス

それにしても、写真の花々の色彩は素晴らしい。目を通して、心にまっすぐにエネルギーを届けてくれます。黄色、白、むらさき、ピンクなど、自然の造形に感謝する季節でもあります。また、活性化するのは人間だけでなく、タヌキも活発に動き始めて、心浮き立つ良い季節です。



出合ったタヌキ

特にコロナ禍で自宅に閉じこもっている身だと、余計に気持ちが湧き立ちます。芽吹く季節は本来素晴らしいものかもしれません。冬の間は、身を縮めて、じつと春を待つ。その待望の春が来たら、身体中の生気が活性化して、心も活性化していく。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の清明」
 遠野 1000 景より



クロッカスとミツバチ



キクザキイチゲ



フクジュソウ



ミツバツツジ



ショウジョウバカマ



ユキワリソウ

津軽、遠野、会津、仙台— それぞれの東北学その後の事

首都圏を中心とした、他地域に住む東北出身者や、所縁の者、または東北関連の何らかに心動かされる者を、文字通り東北へ向かわせる、あるいは「東北回帰」させる、一つのインパクトが九〇年代に起こった(少なくとも、筆者としてはそう思っている)。それが赤坂憲雄の著作『東北学へ』(一九九六年)である。

東北を学ぶ、東北の学問・それは一体、何なのか? 一人の静かなるオビニオン・リーダーの活動は、東北に新設された芸術大学への奉職に合わせるように、その後二〇〇〇年代を通して「津軽学」「盛岡学」「会津学」など各地の地域学勃



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

まず第一に東北視点から物事を考えるにあたり、「蝦夷」という未だ謎とロマンティズムを秘めた概念を基層のアイデンティティとして提案し明確にする事。柳田國男が欧米に比肩する帝国日本の確立の為、作り出した「単一民族・稲作絶対主義」を原則とする柳田民俗学への挑戦的姿勢。そして高度経済成長期とともに謳われるようになった「懐かしい東北」という、東北を捨てた人々の作り出した幻想との決別の意志。これら長い長い時代の間東北をネガティブイメージで縛り付けてきた巨大なテーマに、詩人でもある赤坂氏独特の文体で斬り込んだ東北学は、着実に認知され各方面へ地道に影響を及ぼしていったのである。

九〇年代当時新進気鋭の民俗学者(いや、むしろ民俗学者を名乗る事自体アカデミックな世界では異端なのかも知れない)であった赤坂氏は、それまでも柳田國男や遠野、地域境界や被差別民、天皇論など地方への新たな視点を開くような、書棚でも異彩を放つ論考を数々世に問うていた。「東北学」の名称や方向性の創始は、東北古代史から日本を捉え直す重要性を示した歴史学者・高橋富雄によるものだと赤坂氏自身が語っているが、全三部作からなる本書に展開される東北学「入門編」は極めてオリジナルな語り口と輪郭を伴っていた。

一方、『会津学』や『津軽学』の重厚で堅実な地元への研究姿勢に比して『仙台学』は物足りない、という書評も多かったと記憶している。確かに、冒頭の熊谷達也氏の序文も軽妙を通り越して浅はかな地元自慢かばやきのように思えるし、企業の社長との対談とか仙台の東北における位置とか責任とか、新聞の経済面の記事のようで学究的な緊迫感や純粋さに欠ける気がして、このどろどろが学問なんだと勘ぐりたくならない事もないところはある。考えてみれば、津軽や会津はいかに民俗学・フィールドワークにふさわしく相性も良いと思われる土地柄であるのに対して、仙台のような大都市に民俗学的方法論を持ち込むという試みは珍しく、故に『仙台学』

はこれら東北学からの派生組の中では異色であり、違和感を以て捉えられてしまったのかも知れない。だとしても、大都市だからというのはいささか誤って、表層的な繁栄やノスタルジックの視点だけではない「もつと何かワクワクさせてくれるテーマはないの?」という読者の苛立ちも尤もだった気がするのである。後年脚光を浴びた四ツ谷用水は『仙台学』とは関連のないところで地道に研究されてきたものであるし、単行本化で話題となった小田原遊廓に関する連載も何故か『仙台学』ではなく『別冊東北学』誌上のものであった。『仙台学』は都市の多彩さ、真髓を今ひとつ把握できず、花として咲き切れなかつた印象があるが、実際の都市仙台の底知れぬ素材と学問の種子はまだまだ発掘されるのを待っている。そんな気が今もしているのである。

ところが、ここ数年これら東北学、及び暖簾分けの各地域学の新刊の姿を書店で見る事が少なくなってきた。『盛岡学』『やまがた村山学』『会津学』そして青森県でも『津軽学』など、東北各地に「東北学」の暖簾分けのような形で新刊行物が次々に誕生する。ちょうど『仙台学』が創刊されて間もない頃、私は東京での十数年の生活を終え仙台へ移住したのだった。が、創刊号にて当時「B常務取締役であった清水慎

まである。一見、東北学というセンサーショナルなムーブメントが一ブームとして過ぎ去り、行き詰まりやネタ切れの果てに、情熱の冷却化が起きたのかと勘ぐってしまうが、東北学を提唱し牽引してきた赤坂氏が東北芸工大を辞し、東北を離れて東京の大学教授になった事も少なからず影響していたのかも知れない。

しかしそれに代わって新たに登場してきたのが『震災学』であった。震災後の二〇一二年を皮切りに、現在に至るまで毎年のように発行され続けている当刊の発売元はその後の多くの東北学関連書と同じく仙台の出版社・荒蝦夷であるが、これまでと違うのが制作元が東北学院大学である事である。当大学は震災当初から教員・学生ともに知力のみならず体力を惜しげもなく投入して深く関わってきた事で知られており、そのバイタリティをバックグラウンドにして生まれた『震災学』に目を通せば、これが紛れもなく震災という「洗礼」を受けて生まれ変わった「東北学」に他ならない事がわかるのである。つまり、震災という視点無しではこれからの東北学は成立し得ないという表明であろうか。おそらく多くの人々がそうであろうが、確かに私自身、先の震災なしには東北について考える事が難しくなった、と感じる。図書館などでも東北関連

の書籍を手にとった際、いつか見たのかを見て、「震災前の本か。」などと色眼鏡で見えてしまうようになった。震災以前と以後を分ける意識は各方面で強く感じられ、震災という出来事の影響がいかに強烈なものだったかが痛感されるのである。かつて赤坂氏と井上ひさし氏の対談で、「車を一人一台持っている」東北は豊かになった、という話があったのが、震災後、原発事故などを経て実は東北の豊かさは表面的なものだった、赤坂氏言うところの、「東北は依然植民地だった」と語り口が一変した事を思い出す。私などは当初から疑問を抱いていて、本当に豊かであれば誰もこの東北を離れず、東京を目指したりはしないし、原発や原発村の実態も、東北が依然植民地である事なども、東北を一刻も早く出て行きたいという焦燥に駆られた青少年にとっては日々の肌感覚でわかってきた事である。震災は、どこか樂觀的で希望的観測を持ち、危機感を緩ませていた東北学を決定的に変え、もつと実地の同視線上に立つ必要性に目覚めさせたのかも知れない。

実は、『震災学』とは別に、近年新しく誕生した『東北学』系統の刊行物がある。二〇一五年創刊の、『石巻学』がそれである。赤坂憲雄氏も参加しているが、発行元は全く新しい地元組織「石巻プロジェクト」である。「仙台学」が仙台という一都市の視点故に行き詰まったかと思われた矢先、逆に石巻という一地域である事を武器にして今こそ、と創刊された経緯は興味深い。これは言うまでもなく、石巻が津波の大きな被害を受けた地域であり、そこから発信する事が、他の全ての被災地の共感を受け、新たな連携と真の復興につなげていけるという展望があつたのである。言うてみれば、『震災学』という、地域の境界を外した巨視的な刊行に対して、あらためて一地域から始める意義を問い直す、一つの挑戦なのかも知れない。そして、古参の「東北学」派生組にも動きが見られた。これも地元の独立組織「津軽に学ぶ会」によって手掛けられてきた『津軽学』12号が昨年二〇二〇年に発行されたのである。実は『津軽学』は「東北学」関連の中で唯一、毎年のように一貫して編纂され続けてきたものであり、それだけに執筆陣が地元で強い意識

と集中力、求心力を持っているという事の証左であろうと思う。一方で、秋田県や山形県内地方など、「東北学」関連の刊行運動には与していない地域にも、それに代わる魅力的な表現媒体が存在し、また新たに誕生してきている事も忘れてはならない事だ。岩手県遠野市の民俗学的情報誌『パハヤチニカ』も『遠野学』の停滞をよそに地道な刊行が続いており、「東北学」の一潮流の盛衰に一喜一憂する事は文字通り杞憂かも知れない、とも思うのだ。



その場所が宝庫である事の証明『石巻学』

それでも個人的に今後気になるのは、十数年来の地元民として『仙台学』が、および本家本元である『東北学』が再び各々の名を冠して復活するか否か、である。震災という苦難を経てより広範な視野と強靱な都市思想を伴った『仙台学』が、そして東北全体を見据えた、各地域学の再び結果する帰着点でもあるべき『東北学』が、いつの日か本棚に再登場する日を密かに、且つ楽しみに待ちたい。